

上野東照宮：歴史

上野東照宮は 1603 年から 1867 年まで日本を支配した徳川幕府を開いた徳川家康（1543-1616）を神道の神様、東照大権現（「偉大なる権現、東の光」）として祀っています。この神社は東京の北に位置する栃木県にある、家康の偉大な聖地であり埋葬地でもある日光東照宮から枝分かれした 100 社を超える東照宮の 1 社です。権現という言葉は、神道の神様として顕現した仏陀という意味で、現在では別々のものと思われているこの二つの宗教が日本ではいかに千年以上にわたって密接に繋がっていたかを思い出させます。

神道と仏教の密接な関係は、1627 年の創建から 1868 年の政府の命による分離に至る上野東照宮の歴史の大半に流れています。上野東照宮は徳川家康の成功裡に終わった日本統一を目指す戦いにおいて家康と最も固い同盟を結んだ武将の一人である藤堂高虎（1556-1630）によって建立されました。かつて高虎自身が所有していたものの、寛永寺という広大な仏教寺院を造営するために幕府の要請によって寄進した土地に建てられました。このため上野東照宮は、現在の上野公園よりも広大な地域に及んだ寛永寺の境内に建てられることになったのです。

高虎が建立した元の建物は 1651 年に、それよりもはるかに凝った作りの建物に建て替えられました。家康の孫、三代将軍徳川家光（1604-1651）が上野東照宮を、本社である日光東照宮の豪華な金と漆の社殿を反映したものにせよと命じたのです。これは、日光まで旅する余裕がない人が多かった江戸（現在の東京）の一般庶民が、しかるべき荘厳な建物で東照大権現に祈りを捧げることができるようにするためでした。今日の上野東照宮で見ることのできる、徳川幕府に忠誠を誓った大名が寄進した 250 基に及ぶ銅と石の燈籠等の装飾物や建造物は、この再建時に建てられたものです。

1867 年の徳川幕府の終焉を招いた政変や戦争を上野東照宮は生き延びましたが、敷地は新政府によって大きく減らされました。明治天皇（1852-1912）が新たな君主となったことか

ら明治維新と呼ばれている政権交代の後、新政府は神道と仏教を分離する決定を下しました。上野東照宮もこれに従って仏教の要素を全て取り除かねばならなくなりました。これには神社の敷地内にあった五重塔も含まれていました。宮司は、五重塔は上野東照宮のものではなく寛永寺のものだと説明して当局を説き伏せ、五重塔を破壊から守りました。それ以来、上野東照宮は不思議な力に守られているのか、第 2 次世界大戦中の空襲の際には爆弾が社殿の裏に落ちたにもかかわらず、爆弾は不発に終わりました。